会員の山口県立華陵高校 JRC〈青少年赤十字〉のチボリ募金活動が、昨年 12 月に青少年フィランソロピスト賞を受賞したことを伺い、その様子や日常の活動を会報でお知らせしたいと、寄稿をお願いしましたところ、先日、顧問の近間先生の方から、当時、正副委員長を務めておられたお二人(写真・前列右端。現在大学１年生)が書かれた原稿をお届けいただきました。ご紹介させていただきます。

「チボリ募金活動 14 年！ 受賞報告 !!」

元ＪＲＣ委員長　　田代　萌
元ＪＲＣ副委員長　池亀 瀬里奈

“一人の高校生では無理でも華陵高校としてなら一人の里子の里親になれるかも・・・!”
平成 11 年度から続けてきたフィリピン・ミンダナオ島の少数民族“チボリ族のこどもへの教育支援；チボリ募金活動”が青少年部門フィランソロピスト賞奨励賞を受賞しました。東京の学士会館での贈呈式には、15 年前に、チボリ募金を発案・創始した先輩２名と、昨年ミンダナオ島を訪れ、初めて里子との歴史的対面を実現した元ＪＲＣ委員長・武居理恵さんも出席されました。

受賞者全員の記念写真〈前列右からお二人が筆者〉

青少年部門の他の受賞者は、生徒会を中心に寒いなか防寒着も身に付けず街頭に立ち、数年で1000万円の募金を集めユニセフに寄付した中学校、自分の歌で被災された東日本の方々を元気づけたいとCDを販売してその利益を全て寄付した全盲の小学生の女の子。華陵高校とはまた違った視点から自分達にできるボランティアを継続していくその意識・志の高さに驚きました。また、大人の部門では自費でパーティーを開きチャリティの収益金を寄付している外国人の方、得意な卵焼きを販売してその利益を全て東日本に寄付したおばあちゃん。自らも被災しながら、自分のできることは食べ物の支援だと考え、震災直後にラーメンの炊き出しをし、また独特の書体を生かしたＴシャツ販売の売り上げを児童養護施設に送り続けているラーメン屋さん。皆身近な自分のできることからボランティアを始め、その活動の根底には“フィランソロピー（社会貢献）の精神”が感じられ大変感動しました。

“一人ひとりが好きな距離で関われる活動に”、これはチボリ募金を発案した先輩の方の言葉です。

一人の里子に責任を持つということは決して簡単なことではなく、途中で安易に投げ出すことはできません。チボリ募金がこれまで当たり前のように続けてこられたのは、この言葉を軸にすることにより、華陵生のボランティアに対する敷居がいい意味で低くなっているからかもしれません。その結果として、今回このような賞を受賞できたことをとても光栄に思います。チボリ募金に協力してくださった卒業生の方々、在校生、そして既に閉鎖されましたが事務局としてお世話になった『チボリ国際里親の会』、また新たに受け入れていただいた『ビラーンの医療と自立を支える会』の皆様方に心より感謝を申し上げたいと思います。

チボリ募金活動は里子にとってだけでなく、私たちにとっても支援の意味、人としてのあり方、国際理解や次のステップに繋がるボランティアへの意識を深める良い機会となっています。“してあげている”という発想ではなく 、“私たちも得ているものがある”という、お互いが支え合いながら幸せになる“ウィン-ウィンの関係”になっていければいいと思っています。

75 号で、チボリ訪問記を寄稿いただいた武居理恵さんに、母校での講演のご報告をいただきました

今年の９月に母校の文化祭で、写真展と、「チボリをたずねて」と題して講演をさせて頂きました。里子であるフローディレンちゃんとの出逢いや現地へ行って気づいた課題などについてお話しました。講演後、「自分たちがしているチボリ募金の重要さがよくわかりました」「これからも募金頑張ります」等と言って頂き、とても嬉しい気持ちになりました。これからも生徒たちにはチボリの支援を通して世界に目を向け続けてほしいと思います。　　武居理恵

＊75 号で武居さんを JRC 初代委員長とご紹介致しました。初代は誤りです。お詫びして訂正いたします。